

鼠咬症ノ一治驗

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30702

實 驗

鼠咬症ノ一治驗

富山市 福田 美明

鼠咬症ハ敢テ珍ラシキ疾病ニ非ズ。サレバ同病ニ關スル報告ハ内外共ニ昔ヨリ多數ニ存在スルモノトス。殊ニ二本博士等が大正四年八月九日同病患者ノ第一例ニ就キテ、又同年十月十二日第二例ノ患者ヨリ得タル腋窩淋巴腺ノ穿刺液中ニ「スピロヘータ」ヲ發見シ、次デ組織的檢索ニ成效シ、是ト同時ニ石原博士ハ實驗的鼠咬症ノ動物ヨリ生活「スピロヘータ」ヲ得ルニ至リ形態運動性狀ヲ明ニスルヲ得タリ。然モ二本博士等ハ家鼠ノ口腔中ニ少數ナガラ此「スピロヘータ」ヲ證明シ、且ツ粘膜下組織ヨリ多數ノ「スピロヘータ」ヲ證明シ、更ニ粘膜上皮ニ向ヒ組織ヲ貫通シ來リツツアルコトヲ證シテ感染經路ニ光明ヲ與ヘ、又島峯博士ハ是ガ純粹培養ニ成效シ各方面ヨリ本病ノ病原ヲ確定シ、此「プロトツオア」ヲ *Spirochaeta morsus-muris* ト命名セリ。

本病毒ハ家鼠中ニ保有セラル、事最モ多キモ猫咬、鼯咬ニテモ本病ヲ發ス。則井戸、和邇氏ハ鼯咬症ニ本「スピロヘータ」ヲ證明シ、北川、向山氏ハ猫咬症ニ同様「スピロヘータ」ヲ證明セリ。サレバ獨リ家鼠ニ限レルモノニ非ザルナリ。

予ハ遇マシ本年十月一日鼠咬症ノ一例ヲ實驗治療シ、興味ヲ感ゼシマ、記述スルコト、セリ。

一、庄司某、六十二歳ノ男子、實商。

一、既往症。年來健康、花柳病等ノ「アナムネーゼ」無シ。

本年九月十二日夜一家鼠ノ鼠咬ニ入レルヲ認メ、是ヲ捕ヘントセシニ誤

テ右拇指球部ニ鼠咬ヲ受ケタルモ差シタルコトナリ、某醫ヨリ膏藥ヲ貰

ヒ貼シ置キシニ兩三日ニテ意ニ介セザルニ至リヌ。然ルニ同廿七日(咬傷後十五日目)一旦治癒セシ咬傷ノ局部腫起シ疼痛ヲ訴ヘ、同時ニ全身違和甚シク惡寒戰慄アリ。食思不振トナリ漸時局部紅斑ヲ呈シテ前腹ニ波及シ、前臍中央部ニ達シ發熱甚シク頭痛惡心アリ。氣分勝レズ次テ兩下肢ノ大腿外側ニ鶏卵大ノ發疹紅斑ヲ生ジ、周圍ハ紫紅色ヲ呈スルニ至リ患者ハ驚愕シテ來院治療ヲ乞フニ至リヌ。

一、現在症。自覺的ニハ全身違和、惡寒、惡心全身ノ疼痛感アリテ食思不振ナリ。

他覺的ニハ体格營養中等、胸部、腹部、内臟ニ異常ヲ認メズ。手掌ヲ見ルニ右拇指球部表皮剝脫シ、鼠咬部ニ相當スル所深ク皸裂狀ヲ呈シテ眞皮ニ達ス。右前臍ハ腕關節部ヨリ橈骨側ニ沿フテ前臍ノ中央ニ至ル紫紅色ノ腫起斑點ヲ有シ發熱アリ。體溫三十八度一分ナリ。腺腫ハ著明ナラザルモ腋窩腺ハ鋭敏ナリ。

依テ既往症及現症ニ徴シ鼠咬症ト診斷シ、局部紅斑ニハプロー氏液ニテ

以上ハ鼠咬症ノ一例ニ過ギズト雖モ、潜伏期、症狀經過等ニ就キ先輩ノ報告ト對照スルニ興味深キモノアリ左ニ概括セバ、

潜伏期ニ就テハクローン氏ガ四十九例ノ統計ニヨレバ、

一―五日ハ十一例 六―十五日ハ二十七例 十六―三十三日ハ十例 六十日ハ一例

ナリシト云ヒ、六―十五日ノモノ最モ多ク、則五十五%過半數ヲ示セリ。又二木博士ノ十三例ニ據レバ約二週間内外ニシテ、最モ短キハ十日間、最モ長キハ一ヶ月間以上トアリテ、人症ニ於ケル潜伏期ハ可ナリ長短アルモノトセラル。予ノ例ハ咬傷後十五日間ニテ發症シ、所謂クローン氏ノ六―十五日二木博士ノ二週間内外ニ一致ス。

症候。前驅症トシテ一旦治癒シタル咬傷部ノ疼痛腫起硬結アリ、次デ淋巴腺ノ疼痛、惡寒、發熱、發疹出現等全

署法シ經過ヲ見ルコト、セリ。然ルニ翌二日ニハ惡寒、發熱アリ、食思益々不進トナリ、氣分勝レズ局部ノ紅斑ハ其腫起面積ヲ増シ、漸時紫紅帶縁ニ變ジ更ニ新ラシク鼻梁中央及左頸部、胸鎖乳嘴筋中央部ニ發疹紅斑ヲ生シ尙ホ下臍中央外側ニモ同様發疹シ不快ノ壓痛感ヲ訴フ。依テ「イマミコール」〇・七ヲ右臀部筋肉ニ注射ス。

十月四日全身症狀輕快、體溫三十六度八分、發疹ハ漸時消散シ黑色ヲ帶ビ落屑狀トナル、「イマミコール」〇・七左臀部内注射ヲ行フ。

十月六日諸症消散局部ハ色素ノ沈着ヲ殘シテ治シ、食思進ミ身體爽快ヲ訴フ。然レドモ念ノ爲「イマミコール」〇・七右臀部内ニ注射シ、何等カ異狀アレバ速ニ來ルベキヲ約シ治療ヲ止ム。

然ルニ十月十日來院輕度ノ顔面浮腫ヲ訴フ。檢尿スルニ輕度ノ蛋白反應アリ。安靜ヲ命ジ刺激性食物ヲ避ケ醋剝ヲ投ゼシニ浮腫消散蛋白反應去リ、今日ニ至ルモ何等異常ヲ認メズ。

ク定型のニシテ、熱モ弛張性ニシテ局部ノ發疹モ漸時咬傷部ニ近キ部ヨリ發シ、其大キサモ小ハ指頭大ヨリ手掌大ニ至リ可ナリ浸潤ヲ有シテ壓痛アリ、一見水泡狀ヲ呈シ紫紅色ナリ、腺ハ腫脹著明ナラザルモ指壓ニ對シ鋭敏ナリ、全身症狀ハ全身倦怠、食思不振、頭痛アリ、精神沈鬱シ身體各所ノ疼痛過敏症ヲ有シ惡心アリ。

經過。小生ノ例ハ「イマミコール」注射ヲ行ヒシ爲メ、真正ナル經過ヲ見ルヲ得ザリシハ遺憾トス。則最初局部ノ瘳法ノミニ止メタリシモ、諸症増悪ノ傾向甚シキヲ以テ翌日「イマミコール」注射ヲナシ、隔日三回ニテ諸症全部消散今日至ルモ何等發作異變ヲ認メズ。

然ルニ當時(十月十日)經度ノ顔面浮腫蛋白尿ヲ有シ、腎臟炎ヲ併發セルハ石原博士ガ動物實驗ニ於テ既ニ腎臟炎ヲ證明シ、又腎臟ノ組織的検査上、皮質ノ毛細管ハ甚シク擴張充血シ所々ニ小溢血點アリ。迂曲細尿管及糸毬體ニハ往々細胞ノ輪廓不明トナリ、硝子樣變性ヲ呈シ急性腎臟炎ノ像アリト。サレバ予ノ一例モ又此腎臟變化ヲ起セシモノトス。殊ニ本症ノクローン氏ノ五十二例ノ病例中尿検査ヲナセシ記載アルモノト、又検査不明ノモノトアルヲ以テ百分比例ハ不明ナルモ、其中九例ハ確實ニ臨牀上腎臟炎ヲ認メタリト。サレバ予ノ一例モ又此腎臟變化ヲ起セシモノトス。殊ニ本症ノ治療ニ就テハ其病原今ヤ「スピロヘータ」ナルコト明カトナリ。且ツ谷口博士ハ本病ニ「サルヅルサン」ノ卓効アルヲ力説セシ以來一般ニ試ミラル、ニ至リ最近、伊東、松崎氏等ハ「イマミコール」注射ノ効果アルヲ報告セラレ、予モ又本例ニ「イマミコール」注射ヲ施シ、意外ノ効果ヲ得タルコトヲ信ズ。本注射ハ「サルヅルサン」等ニ見ル新鮮餛水ノ作製、注射操作ノ繁雜ナク、至極簡單ニ行ヘ得ルヲ以テ本病治療ニハ先ヅ試ムベキモノトス。

臍窩ヨリ排泄セラレタル蛔蟲ノ一例

金澤醫學士 團 野 輝 雄

蛔蟲ハ人體寄生蟲類中、最モ屢々遭遇スル處ノモノニシテ、特ニ本邦ニ於テハ其症例ノ多數ナル遙ニ歐洲諸國ノ上